

第11回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

赤いパンツと母と私

鈴木 恵子・東京都中野区

七年前に九十三歳で亡くなった夫の母との思い出である。

母は私の作ったものを食べなかった。炊き込みご飯や煮物などを持って行って食卓に並べても、食べようとしない。息子である私の夫が粘り強く勧めると、ようやく箸をとって「大丈夫か」と言いながら一口食べる。そして、無表情に箸を置く。二口目はない。いつもそうだった。私は嫌われているのだと寂しかった。

実家での食事の後、母はすぐに台所に立って食器を洗い始める。私もそばに行き、手伝おうとする。母は、「いいよ、いいから」と言う。「じゃ、お皿を拭きますね」と言って洗いかごに手を伸ばすと、「いい、このままで」と強い口調で言って、洗いかごのふたをぴしゃりと閉める。心のふたもぴしゃりと閉めてしまう。いつもそうだった。やはり私は嫌われているのだと寂しかった。そのためか次第に実家から足が遠のいてしまっていた。

ある年の正月のこと。母が、頼みたいことがあると言ってきた。必死の形相だった。

「申年に娘から赤いズロースをもらうと、一生シモの世話にならなくてすむんだって。娘がない人は嫁でもいいんだって。だから買ってきて」

その時、母はいったい何歳だったのだろう。暦をひもといてみた。当てはまりそうなのは一九九二年。母、七十歳だ。

母にとつて、自分が年老いて身の周りのことができなくなること、特にシモの世話になることは恐怖に近いものがあつたのだろうか。

私はすぐに「おばあちゃんの前宿」と呼ばれている巣鴨に出向いた。母に頼りにされたことが無性に嬉しかった。

巣鴨の商店街は赤いパンツの店だらけだった。私はよさそうなものを選んで購入した。そして、母に渡した。母は満面の笑みを浮かべ、それまでのどんなプレゼントよりも嬉しそうに受け取ってくれた。

その後そのパンツは身に付けたのか、お守りとしてしまっていたのかは分からない。でも、その時以来いつもぴっちり閉まっていた母の心のふたが、ほんの少し開いたように感じた。八十代半ばになる頃、母の認知機能に衰えが見られるようになった。家事がおろそかになる。時間の感覚がなくなり夜中にご飯を炊いたりする。

普段は父と二人で暮らしていて、二階に住む次兄家族が見守ってくれていたが、離れている長兄夫婦と私たちも定期的に訪ねて行くようにした。それまでは数ヶ月に一回しか訪ね

ていなかったのだ。父も母も初めは戸惑っていたが、だんだん私や夫が来るのを楽しみにしてくれるようになっていった。

そして、何度か訪ねて行くうちに何と母が、私が作った物を「おいしい、おいしい」と食べてくれるようになったのだ。もう「大丈夫か」は言わない。

一緒に台所に立ってくれるようになった。世間話をしてくれるようになった。洗いかこのふたを閉めることはなくなった。私は涙が出た。

母は、戦前、戦中、戦後のつらく貧しい時代、女性として求められる役割をしつかり果たさねばと必死に生きてきたようだ。父との結婚も自分で決め、その後の家庭生活すべてをひとりで担ってきた母。生活習慣や価値観の違いに戸惑うこともあっただろう。山形の方言を息子たちにまで悪しざまに言われたこともあったようだ。そんな生活の中でかたくなになつてしまった心が、ようやくほじめてきたようだった。

早くからもつともつとそばにいて、一緒にお茶を飲んだり、お菓子を食べたり、テレビを見たりすればよかった。母は私を嫌っていたわけではなく、人見知りだけで気なだけだったのだ。寂しかったのは母だったのだ。

それから数年は一緒に穏やかな時を過ごすことができた。

母がおむつをして寝たきりになったのは晩年になってからだった。もう自分の置かれていた状況を理解できなくなっていた。シモの世話になっていくという意識はなかっただろう。それを思うと、私があげた赤いパンツは確かにご利益があったのかもしれない。

先日、久しぶりに巣鴨に行ってみた。コロナ禍のためか人は少ない。あんなにあつた赤いパンツの店はほんの数軒になっていた。自分のために一枚買った。

あと数年で私は、赤いズロースをほしがつた母と同じ年齢になる。私はどんな年寄りになるだろう。いや、すでになっているか。どんな私でも、家族は受け入れてくれるにちがいない。私が母に対してそうだったように。だから、安心して年を重ねていける。